

形成外科・再建外科

～乳房再建についてご紹介します～

津島市民病院
形成外科医師

山内 真紀子

形成外科は、体表面の先天的・後天的変形や欠損を修復し、形態面・機能面の両面の回復をめざす外科系診療科です。失われた形と機能を作り直すという意味で、再建外科とも言われます。従って、患者さんやその家族の多くは、「他の人と違って目を引くので、いわゆる普通の形に治してほしい」と訴え、外来を訪れます。これらの人々を社会に適応させ、Quality of life (生活の質) を高めることが我々形成外科医の目指すところです。

具体的に扱う疾患は、すべての傷や変形をきれいに治し、形と機能を作り直すことを主目的に以下の様に大きく分けられます。

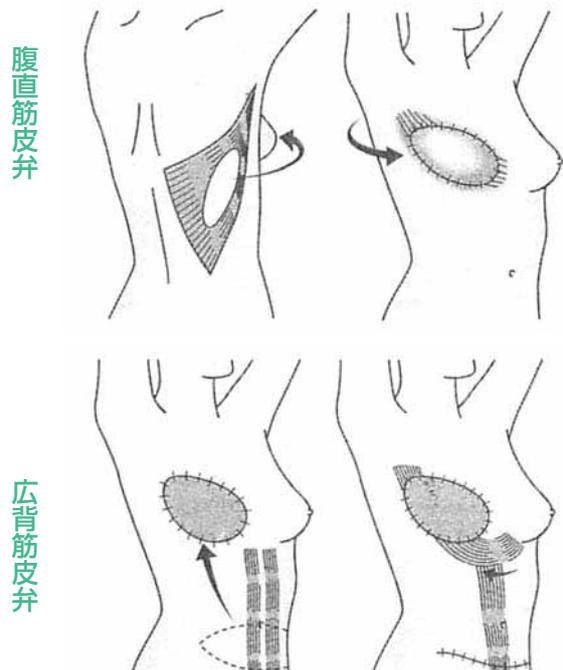
- ①外傷
- ②先天異常
- ③良性・悪性腫瘍・腫瘍切除後の「再建」、あざ
- ④美容
- ⑤熱傷

今回は悪性腫瘍である乳癌にて乳房を失ってしまった患者さんを対象に、乳房を作り直す、「乳房再建」について簡単にご紹介したいと思います。最大の目的は整容的に満足しうる左右対称な乳房形態の再現です。

方法は、①自分の組織を使用する方法と②人工物を使用する方法の2つに分けられます。それぞれに利点と欠点があり、患者さんとよく話し合った上で一番良い方法を選びます。

まず一つ目は、自分の組織を利用して再建する方法で、「自家組織移植法」といいます。現在乳房再建に用いられている自家組織再建材料は、腹直筋皮弁、広背筋皮弁が主体です。腹直筋は腹部を縦方向に走る筋肉です。広背筋は背中にある筋肉です。それぞれ、筋肉の一部とそれを栄養とする血管と周囲の脂肪組織を同時に採取し、欠損した乳房へ移植します。筋肉の一部と一緒に移植することで、移植した組織へより安定した血液の流れを維持できます。また、自己の組織を使用するため、より自然な質感の乳房再建が可能です。一方で、組織を採取するため、患者さんへの負担を伴います。患者さん個々の生活様式や将来を考えた上で

選択する必要があります。



▲宇田宏一編著「モバイルブック形成外科」菅原康志監修
克誠堂出版 より引用

二つ目は、人工物(マンマプロテーゼ)を挿入する方法です。人工物を使用するため、自己の組織を採取する必要がなく、患者さんの負担(手術侵襲)が比較的軽くなります。一方で、人工物ですので、破損・露出などの合併症が挙げられますが、大胸筋という筋肉の下に挿入することで回避しやすくなります。また、人工物は人間の体にとっては「異物」ですので、周囲に膜を作ってしまうことにより乳房が縮み、形態や質感を損ねることがあります。

このように、乳房再建の方法はいくつかあり、これからも進歩していく分野です。

形成外科では、前述のように、本当に幅広い疾患を扱っています。今回ご紹介できたのはごく一部ではありますが、失われた形態や機能を回復し、患者さんやご家族が少しでも豊かな社会生活を送ることができるよう、お力になりたいと思っています。